「遠藤周作文学館」落成記念講演会

遠藤周作文学館が長崎県外海町に完成。
落成を記念して、加賀乙彦氏、三浦朱門氏、瀬戸内寂聴氏が
「遠藤周作の作品と人柄」を語る。

5月、長崎県外海町の海を見晴らす丘の上に「遠藤周作文学館」が完成し、落成式と共に、遠藤周作の作品と人柄を偲ぶ講演会が催され、全国から遠藤文学フアンが押し寄せた。

講演に先立って、出津（しつ）教会と浦上天主堂では追悼ミサが執り行われた。あいさつの中で遠藤順子夫人は、遠藤周作の代表作となった『沈黙』の舞台であるこの土地は、神様が、自分のためにとっておいてくれた土地だ、と遠藤周作が言っていたことを披露した。

確かに、この出津の地には既に10年以上も前に「沈黙の碑」が建立されており、遠藤氏が『沈黙』を書くために何度も足を運んだという、小説のモデルとなった「ゆかりの土地」である。しかし長崎市からバスで一時間ほどの不便な土地である。

また落成式では、イタズラ好きだった遠藤氏に「いたずらしないで、晴れさせてよ」という遠藤順子氏の祈りにもかかわらず、また「晴れ女」を自称する瀬戸内寂聴氏の参加にもかかわらず、一時、遠藤周作文学館がドシャブリの雨にみまわれるというハプニングもあった。

加賀乙彦氏
「沈黙とその時代」
出津教会にて

「遠藤周作の代表作『沈黙』は、キリシタン史の全てを集約し、史実を越えて、生き生きと活写した傑作であり、260年間以上も続いた、隠れキリシタンの信仰の熱き思いを伝えるメッセージでもある」と語り、史実ではありえない出合いの設定を自在に構成する遠藤フィクションのすばらしさをたたえた。

一方、加賀氏は「忠実なキリシタンの歴史書は、史実は豊富だが、読みにくい」と言う。映画化やオペラ化もされた『沈黙』のほうが、過酷なキリシタン時代を、歴史書以上に生き生きと今日に伝えてくれていると、遠藤氏の作品への感謝を述べた。

三浦朱門氏
「ポール遠藤周作からの受け売り
（死海とガリラヤ湖）」
浦上天主堂にて

昔と同じ様に「エンドー」と語りかけながら「遠藤が、長崎の地を私に教えてくれ、イスラエルにも連れて行ってくれた」と、洗礼の名付け親でもある遠藤氏の思い出を語った。

聖地とは、信仰が「ここだ」と教えてくれるもの、聖地を発見した「熱い思い」が信仰である、とイスラエルの聖地訪問で気付いたという。

「最後の晩餐が行われた場所やゴルゴタの丘がどこか、わからないと、キリストの存在自体もわからなくなる」としながらも「ゆるぎない信仰の上に聖地が在り、キリストの存在も、信仰の上にこそ成り立つものである」と遠藤周作からの受け売りを紹介した。

そして、この美しい長崎には、キリシタン以来の強い信仰が生き長らえていること、信仰が「西の方から」やってくると感じていたため、「西の海」を遠藤氏がこよなく愛していたこと、などから、遠藤氏は日本の西端の長崎や外海町を小説の舞台に選んだのではないか、と言う。

また、信仰の厚い、多くのひとびとの心を代弁してすばらしい作品を書いてくれた「遠藤、ありがとう」と故人を偲んだ。

瀬戸内寂聴氏
「『深い河』について」
浦上天主堂にて

主催者より「浦上天主堂の中に、出家したお坊さんが入ったのは瀬戸内さんが初めて」との紹介があった後、講演の随所で、クリスチャンが大部分にもかかわらず、宗派を越えた満場の拍手喝采と笑いが沸き上がった。これだけ屈託なく教会堂の中で笑える聴衆も、瀬戸内氏と同様に、きっと心の広い人たちだろう。

ミサの挨拶で遠藤順子さんがトインビーの言葉を引いて「20世紀は、キリスト教と仏教が和解した時代」とお話しされたのに対して、瀬戸内氏は「両方ともガンコだから、無理に仲良くすることはない」と言いきり、聴衆の興味を引きつけた。

しかし、続いて、遠藤順子さんがクリスチャンでありながら、観音経を写経して瀬戸内氏にプレゼントしたというエピソードを話された。また「順子さんは、何と心の広い宗教を信じているのかと、尊敬している」との言葉を聞いて、みんな安心したことと思う。無理をしないで、宗派にこだわらず、自然体で仲の良い遠藤順子氏と瀬戸内氏の心の広さをうかがわせた。

演題にある遠藤周作の『深い河』は、単に主催者が選んだ作品であって、『沈黙』が一番好き、『わたしが・棄てた・女』、『おバカさん』も良いと思う、と率直に語る瀬戸内氏。

1歳しか違わない瀬戸内氏を、遠藤周作が「姉（あね）さん」と呼ぶので、ずいぶん年上に見られ損をした、という。また瀬戸内氏について、遠藤さんが他人にデタラメやウソを言うので、何度も戸惑ったが、そのうち本当になってしまったようなデタラメもあった、という思い出話に、聴衆は何度も大笑い。

しかし、遠藤さんのウソは、人を愉快にするウソ、なぐさめるウソ、楽しくさせるウソである、として受けとめているという。「もともと小説家は、ウソを本当のことようにするのが、商売」とも語った。遠藤周作のウソは、悲しみに耐えて生きている多くのひとたちの「語られない苦しみ」を、笑わせることによって元気付けるためのウソだったと思う、と遠藤周作独特のユーモアを偲んでいた。

（ちなみに、遠藤順子氏は、この遠藤周作文学館を一つの基地として、21世紀には、今度は東から西へ、日本人が身に付けてきた節度とか謙譲だとか礼節だとかいった東洋の諸徳を加えたキリスト像を発信していきたいと願っている。）